

## 商品資本の循環について : 再生産の視角と諸資本の競争 (III)

逢坂, 充

<https://doi.org/10.15017/4403540>

---

出版情報 : 経済学研究. 40 (4/6), pp.201-227, 1975-12-05. 九州大学経済学会  
バージョン :  
権利関係 :

# 商品資本の循環について

—再生産の視角と諸資本の競争(Ⅲ)—

逢 坂 充

## 目 次

- 第1章 再生産視角と競争論の問題
- 第2章 古典派経済学と動態論の方法
  - 1節 古典学派の科学性と根本欠陥
  - 2節 固定観念の止揚と再生産
- 第3章 市場価値論の展開と競争論
  - 1節 動態概念としての市場価値
  - 2節 需要供給分析と再生産

(以上『再生産と産業循環』所収)
- 第4章 資本循環論と競争論
  - 1節 序——両者の連繫
  - 2節 資本循環論の内在的諸問題
- 第5章 再生産把握としての資本循環論
  - 1節 商品資本循環とケネー「経済表」
  - 2節 再生産からみた貨幣資本循環の意義
- 第6章 資本循環論の内的論理の展開
  - 1節 貨幣資本の循環について
  - 2節 生産資本の循環について

(以上「経済学研究」第39巻第1～6合併号)

- 3節 商品資本の循環について
  - (A) 開 題
  - (B) 商品資本循環の内的論理
  - (C) 商品資本循環と社会的総資本
  - (D) 資本循環論と社会的総資本論

## 第6章 資本循環論の内的論理の展開

### 3節 商品資本の循環について

#### (A) 開 題

『資本論』第2部はその標題が「資本の流通過程」とされ、そして冒頭の第1篇で、マルクスは「資本の諸変態とその循環」について、まことに含蓄の深い考察を試みていた。そこでは、周知のように、まず資本循環の3つの形態

$G \dots G', P \dots P, W' \dots W'$  をとりあげて、それぞれのもつ特性を仔細に検討するといった構成がとられ、そしてその上で、これら3つの循環の「統一」をもって産業資本の現実の循環的運動たることを明証しようとする、きわめてユニークな展開が行なわれていたのであった。いわゆる資本循環論のことである。

ところで、この資本循環論に対しては、確かに多彩でかつ濃密な論理がそこに展開されていただけに、これまでも種々な観点や問題意識からする研究が重ねられてきたことは周知のとおりである。だがそれにしても、この資本循環論について、まず第一番に留意すべき肝腎な課題が見落されてはこなかったであろうか。われわれはこのような疑問を念頭において、前稿では、この緊急で肝要な課題とは、マルクスが『資本論』第2部の全体を挙げて究明しようとする「資本の流通過程」にとって、ほかならぬこの資本循環論とはいったい何であったか、換言すれば、「資本の流通過程」が、資本循環論という特有な論理構成によって、いかに、またどのような意味で解明されるというのか——こうした問題の追究でなければならぬ、ということを一貫して強調してきたのであった。およそそのような問題関心よりすれば、なによりもまず資本循環論が、その特有な構成をもって全体として展開する一貫した論理を——個々の循環形態の含意についてはもちろんであるが——あらためて問わねばならぬのであって、この論題こ

それは、われわれが前稿において極力主張した  
 努めて検討もしてきた基本のテーマであった。  
 すなわちそれは、まず  $G \cdots G'$  から始まって  $P \cdots P$  へ、さらに  $W' \cdots W'$  へと赴く「姿態進展」  
 のなかに貫通して示される資本の流通諸態様、  
 つまりは生産的消費と個人的消費とを媒介する  
 さまざまな流通諸契機についてその論理や含意  
 を解明し、その上でこうした「姿態進展」による  
 流通諸契機の全体をとおして「資本の流通過程」  
 とは、要するに再生産を媒介するところの、  
 まさに再生産過程の媒介的運動態様にはかな  
 らぬことを明らかにするものであったという  
 ことができる。じつにこうした論点の認識と把握  
 こそが、資本循環論に関する第一番に緊要な  
 課題であったといつてよく、また「資本の流通過程」  
 の解明をはかならぬ資本循環論でもって  
 開示するマルクスの至難な試みの深い含蓄であ  
 ったと考えられるのである。資本循環論とは、  
 したがって、単なる3つの循環形態の比較対照  
 論に留まるものではなく、いわんや重商主義を  
 始めとする諸学説批判論に終るものでも決して  
 なかったことは、もはやいうまでもあるまい。  
 われわれは、資本循環論が全体として提起する  
 課題につき、いま一度端的にいえば、 $G \cdots G'$   
 より  $P \cdots P$  へ、さらに  $W' \cdots W'$  へと至る「姿  
 態進展」のなかに開展する流通諸態様の論理を  
 とおして、「資本の流通過程」すなわち再生産  
 の運動連関とは何か、を語ろうとするものであ  
 った、ということ意識しなければならぬ。

私は、以上のような問題提起に即して、前稿  
 では、3つの循環の「姿態進展」に貫ぬく論理  
 を、とくに「資本循環論の内的論理の展開」と  
 いう標題を掲げて追究してきたのであるが、そ  
 の際貨幣資本の循環  $G \cdots G'$  と生産資本の循環  
 $P \cdots P$  に関しては、それぞれの内包する流通過

程の意義や特質について一応の吟味を終えた。  
 そこで本節では、同様の観点から、残された商  
 品資本の循環  $W' \cdots W'$  が考察の対象となる。  
 ただそれに先立ち、私は、前稿における一連の  
 考察から、この  $W' \cdots W'$  循環の含蓄する問題  
 性を、その末尾ではぼ次のように示唆しておい  
 た。以下の吟味で、 $W' \cdots W'$  循環の基本的展  
 開視角をなすという意味からも、あえて再述を  
 しておきたいと思うのである。

「およそ以上のような考察から明瞭になった  
 といつてよいが、われわれの提起する問題、す  
 なわち「資本の流通過程」を資本循環論をもつ  
 て究明しようとする深遠な意図とは、要する  
 に、個別資本の特殊な循環形態  $G \cdots G'$ 、 $P \cdots$   
 $P$  と、さらに進んでは  $W' \cdots W'$  の内包する生  
 産から消費への多様な流通契機や再生産の連関  
 をとおして、これら資本循環の「姿態進展」が  
 その全体をもつて社会的な総体的運動連関を形  
 成せずにはやまぬという必然性を展開すること、  
 一言にしていえば、個別から社会的総体性  
 への展開を措定するところにあったといつてよ  
 いであろう。われわれは、『資本論』第1巻に  
 おける商品流通の展開論理を識っている。商品  
 流通  $W-G-W$  とは、個々の商品交換を契機  
 としてはじまる過程が、社会的連関運動にまで  
 開展して「総体としての流通」を形成する。…  
 …こうした関連でいえば、「資本の流通過程」  
 をとくに資本循環論として展開する方法もま  
 た、じつは個別から出発して総体性を措定する  
 商品流通論の展開視角と相似たものであったと  
 いうことができよう。しかもここでは資本の流  
 通論として、つまり生産と消費を社会的拮がり  
 において媒介する資本の流通と再生産の問題と  
 して、一層複雑な「総体性」を形成せずにはい  
 ないであろう。次の  $W' \cdots W'$  の吟味が、この

ような展開視角を一層明らかにしてくれるに違いないし、進んでは社会的総資本としての  $W' \dots W'$  のもつ深い含蓄をも示唆してくれる筈である<sup>1)</sup>、と。

$W' \dots W'$  循環が、確かに、消費の契機を——生産的および個人的消費の双方について——循環そのものの「正常な進行の条件として前提」し、直接内含しており、それゆえに他の個別的諸資本との絡み合いを必然包括せざるをえないこと、かくして総体としての産業資本の流通運動＝諸資本の連鎖の形成を積極的に指定しうる端的な循環形態であったということは、それ自体としてはよく知られている事柄であり、また汎く承認されてもきた、いわば常識ともいえる。けれども、このような  $W' \dots W'$  循環のもつ特性を、一体マルクスはどのような論理や論拠によって展開・提示していたであろうか、という肝腎の問題には、今日までそれほど深い論究がなされてきたようには思われない。そこで、この論点をめぐっての徹底した考察が、おのずから本稿での中心的な課題となるであろう。商品資本の循環を独自取り扱う『資本論』第2部第1篇第3章が、一見あたかも  $G \dots G'$  と  $P \dots P$  に対比しての  $W' \dots W'$  の考察といったいわば比較対照論的色調を濃厚にもって展開されているだけに、また前の2章に比べて分量が少いにもかかわらず、内容はかなり複雑・難解で、それゆえにかえって含蓄深く密度の高いものがあるといっただけに、上の論点追究は別して重要な意義をもつことであろう。さらにいえば、 $W' \dots W'$  循環の分析視角は、ケネー『経済表』とも深いかわりを持ち、したがって当然第3篇の「社会的総資本の再生産と流通」を考察する際の見地とも固く結びつく以上、上のような論点の解明が、社会的総資本の再生産を表示する

$W' \dots W'$  に対しても恐らくあらたな問題を提起して、何かの示唆を与えてくれるに違いない。ともあれ、こうして派生し関連する諸問題を展望しての  $W' \dots W'$  の吟味が必要なのである。そしてそのためには、ある程度の文義的詮索が、精確さを期する意味でも要求されるであろうということを、一言前もって付言しておかねばならない。

#### 註

- 1) 拙稿「再生産の視角と諸資本の競争(続)」『経済学研究』(九州大学)第39巻第1～6合併号、264ページ。

#### (B) 商品資本循環の内的論理

第3章「商品資本の循環」は、冒頭からして既に一種独得である。すなわち、まず一般定式が  $W' - G' - W \dots P \dots W'$  として示されたあと、この循環は他の資本の存在と絡み合いとを前提するという特性をいち早く暗示するかのようになり、次のような記述をもって始められる。

(I) 「 $W'$  は前述の2つの循環の産物として現われるだけではなく、それらの前提としても現われる。なぜならば、生産手段そのものが、少くとも一部分は、現に循環している他の個別資本の商品生産物であるかぎり、一方の資本にとって  $G - W$  であるものはすでに他方の資本にとっての  $W' - G'$  を含んでいるからである<sup>1)</sup>」と。

$W'$  が、「前述の2つの循環」 $G \dots G'$  と  $P \dots P$  にとって、その「産物」であるばかりか、じつは「前提」でもあったということがいまあらためて確認されるのである。ただし、ここにいる「前提」とは、「一方の資本」の  $G - W$  に対しては「他方の資本」が  $W' - G'$  をもって対応しているという意味でのことであって、この点やはり注意を要する。なぜなら、 $W' \dots W'$  循

環はその起点が  $W'$  であることによって、ここでは起点  $W'$  の立場から、ひるがえって「前述の2つの循環」が想起されているからである。そしてこうした事情は、「前述の2つの循環」に関する考察、とりわけ  $G \cdots G'$  循環の考察の際に、この点への積極的な論究を——「前提」であったにもかかわらず——あえて行なわなかったこと、というよりもむしろ行うべきではなかったことの理由を説明してくれるであろう。けれど  $G \cdots G'$  循環では、発端が  $G$  で始まるころに意味があり、したがってその第1段階  $G-W$  は、「ある貨幣額がある額の諸商品に転換されることを表わす」<sup>2)</sup> 流通過程、すなわちただ商品への形態転換としてそれ自体はあくまでも一般的商品流通の過程であって、決してある額の商品資本への転換を示すものではないこと、だからこそこでの考察の主眼が、 $G$  が変態する  $W$  の独得の「素材的内容」すなわち  $P_m$  と  $A$  の存在そのものに関して、その社会的な性格や歴史的規定性を明らかにし、もって流通  $G-W$  の特有な意義を説明することに集中されていたからである<sup>3)</sup>。しかもこの流通「 $G-W < \frac{P_m}{A}$ 」完了後の直接の結果は、貨幣形態で前貸された資本価値の流通の中断<sup>4)</sup>、すなわち生産過程への移行なのであるから、 $G-W$  の際の  $W$  は何ら商品資本ではないばかりか、少くともその一部分はもはやいかなる意味でも商品ということさえできなくなって、 $P$  の過程の諸要素以外ではないといわねばならない。なぜならば、「資本家は労働者を再び商品として売ることはできない。労働者は彼の奴隷ではないからであり、また、資本家を買ったのは、一定の時間を限っての労働者の労働力の消費以外の何ものでもないからである」<sup>5)</sup>。そしてこの点は、単なる  $W$  そのものが循環の起点となって、 $W \cdots$

$W$  なる循環の成立しがたい理由であり、またおよそ意味をなさない所以でもある。

ともあれ以上のような事情から、 $G \cdots G'$  循環の考察では当然にも伏せられていた  $G-W$  に対応する  $W'-G'$  が、ここ冒頭で  $W'$  の立場からあらためて想起され、かくして「他の資本」の存在が最初から想定されていたということはともかくも注目されてよい。同様の趣旨が次のようにも敷衍されて述べられるのである。

(II) 「 $W'$ 」がある1つの産業資本の循環のなかで  $W$  として現われるのは、この資本の形態としてではなく、その生産手段を生産物とするかぎりでの、別のある産業資本の形態としてである。第1の資本の  $G-W$  (すなわち  $G-P_m$ ) という行為は、この第2の資本にとっては  $W'-G'$  なのである<sup>6)</sup>。

ここにも2つの資本の存在が指摘されている点、留意されたい。そして先にも触れたように、「 $W'$ 」がある1つの産業資本の循環のなかで  $W$  として現われるのは、この資本の形態としてではない」ところに、 $W'$  が単なる  $W$  としては決して循環を開始しえない理由があったという点にも。

さてしかし、ここでもう一度注意を促すべく急いで訂正の指摘をしておかねばならぬのは、 $G-W$  と絡み合い  $W'-G'$  をいうことで、そこから直ちに  $W' \cdots W'$  循環の含蓄する「総体としての流通」の成立を導出したたり、結論づけたりするものでは決してなかったという点である。そうではなくて、あくまでも  $W' \cdots W'$  循環の孕む論理や特性に深く内在して論証しようとするのであって、そこにこそ、マルクスがこの循環の特有な意義を賭けて鋭く追求してやまぬ肝心の問題があったということ、前項の「開題」でも既に指摘してお

いたが、くれぐれも銘記されねばならぬ論点である。では、この  $W' \cdots W'$  循環の内的論理とはいったい何であろうか、われわれはいよいよ本論へ一歩踏み込もうとするのである。

ところで、まず商品資本の循環を他の循環形態から区別する際立った特徴は、いうまでもなく、発端が  $W'$  であって単なる  $W$  では始まりえないところから、「ただこの循環の場合にだけ、これから増殖される最初の資本価値がではなく、すでに増殖された資本価値が価値増殖の出発点として現われる」<sup>7)</sup> という点にあった。そしてこの特性のゆえに、第Ⅲ形態  $W' \cdots W'$  循環は「決定的な影響を与え」られて、その最初の段階が次のような二層の「循環」を含むことが、上の文章に直ちに続けて語られるのである。

(Ⅲ)「ここでは資本関係としての  $W'$  が出発点であり、またそのようなものとして全循環に決定的な影響を与える。というのは、 $W'$  はすでにその第Ⅰ段階で資本価値の循環とともに剰余価値の循環をも含んでおり、そして剰余価値は、各個の循環でではなくとも、平均的には、一部は収入として支出され流通  $w-g-w$  を通らなければならない、一部は資本蓄積の要素として機能しなければならないからである」<sup>8)</sup>。

もともと資本循環論の考察で全体を包括する展開の視座なり着眼点というものは、それぞれの発端極が何であるかによって種々規定される循環的特質や意義を究明して、「資本の流通過程」の態容を認識するところにあった、ということが出来る。その意味では、およそ発端極がそれぞれの「全循環に影響を与える」のは、何も第Ⅲ循環にのみ限られることなく、第Ⅰ循環  $G \cdots G'$  や第Ⅱ循環  $P \cdots P$  ととても同様な筈であろう。

例えば循環Ⅰでは、発端極が「価値の独立な手をつかめる現象形態」たる  $G$  の前貸という特殊な規定性のゆえに、「 $G \cdots G'$  は、ただ、価値の面だけを、全過程の目的としての前貸資本価値の増殖だけをさし示し」<sup>9)</sup>、したがって「資本主義的生産の推進的動機を、まったく手にとるように表わす」<sup>10)</sup> のであった。したがってそこでの流通が、価値増殖のための、ただ「金もうけのための流通」<sup>10)</sup> という性格を端的に示すことはいうまでもなく、そしてこの特性が、生産過程を間にはさむ流通の「中断」すなわち  $G-W \cdots W'-G'$  という他の循環形態にはみられない独得の様式によって確認されると同時に、他方その生産過程に対しては、これを「ただ金もうけのためのやむをえぬ中間の環」<sup>10)</sup>「必要悪」に貶めるといった性質のものであった。かくして  $G \cdots G'$  が、ただ生産的消費のみを含むにすぎぬといったことも、以上のような特性からする当然の帰結であったといつてよい<sup>11)</sup>。

次に循環Ⅱでは、発端が生産資本の形態  $P$  それ自身で始まることから、「 $P \cdots P(P')$  は、生産資本の不変の大きさでの再生産過程かまたは増大した大きさでの再生産過程(蓄積)としての生産過程をさし示している」<sup>12)</sup> のであり、それゆえここでの流通は「2つの互いに補足し合う段階をもつ総流通」<sup>13)</sup> として、「ただ再生産過程の媒介として現われるだけであり、したがって  $P \cdots P$  のあいだの媒介運動を形成している」<sup>13)</sup> ものであった。そして流通様式の点では、循環Ⅱは循環Ⅲと全く同様で、総流通が  $W'-G' \cdot G-W = W-G-W$  であったし、さらにこの循環Ⅱが資本価値部分と剰余価値部分との分割をその内部で不可避的に指定し、したがって当然それらの流通と循環を含みうるものであったこと、しかもそのためには他の資本の

存在をも「前提」せざるをえぬことが多少なりとも暗示されていたことなどについては、前稿で詳しく論及しておいた<sup>14)</sup>。そこで、以上のようにみてるならば、少くとも流通形態上では、循環Ⅱは循環Ⅲと相等しいともいえる内容を含蓄していたようにも考えられよう。にもかかわらず、循環Ⅲの場合に  $W'$  が発端であることによって「全循環に決定的な影響を与える」と格別の注意が促がされるのである。では、この注意の意味するところは何であろうか、少し考えてみよう。

われわれはこれまで、循環Ⅰと循環Ⅱの特質を対照させて若干の点を反省してみた。そこで、こうした比較対照的見地からいえば、上の意味なるものを以下のような問題に翻訳してみてもどうであろうか。すなわち  $W' \dots W'$  の総流通が、 $G \dots G'$  の場合は無論のこと、とくに  $P \dots P$  との対比において、——というのは既に承知のごとく総流通が全く同一なるがゆえに——異なる点はどこにあるのか、という問題に言い換えてみることである。そうすると、流通形態  $W-G-W$  は同じでありながら、循環Ⅱの場合にはそれが「2つの互いに補足し合う段階」からなる総流通と規定され、だから  $P \dots P$  の間を媒介する運動過程として、「再生産過程としての資本の生産過程を媒介する流通運動」、一言にして「生産を媒介する流通」、 $W'$  のための流通」という性格を示すのに対して、循環Ⅲでは、それが「2つの反対の段階をもつ総流通」と規定され、しかもその第1段階で  $W'$  は「商品形態で増殖された資本価値で始まり、したがって、はじめから、商品形態で存在する資本価値の循環だけではなく剰余価値の循環をも含んでいる」<sup>15)</sup> という特殊な内容規定からして、ここでの総流通とは要するに「再生産にと

っての消費を媒介する流通」、端的に「消費のための流通」といった特殊な性格を意味するものとして、ひとまずの区別を想定してもよいであろう。これに反し、循環Ⅰの流通形態が何を語るかは、いうまでもなく既に明らかである。じっさい、上掲(Ⅲ)の文章に直接続けて、循環Ⅲが「消費」の問題と密接に関連する旨、だが一見唐突とも思えるような、あるいは結論をいわば先取りしたかたちでもって、次のように指摘されるのであるが、これを、したがってわれわれは上のような「ひとまずの区別」として承しておくことにしよう。

(Ⅳ)「 $W' \dots W'$  という形態では、商品生産物全体の消費が資本そのものの循環の正常な進行の条件として、前提されている。労働者の個人的消費と、剰余生産物中の蓄積されない部分の個人的消費とは、個人的消費の全体をなしている。だから消費は、全体として——個人的消費としても生産的消費としても—— $W'$  の循環にその条件としてはいるのである」<sup>16)</sup>。

第Ⅲ循環が、生産的消費についてはもちろんのこと、個人的消費をも「資本そのものの循環の正常な進行の条件として前提」する、というのである。してみれば、逆に第Ⅰ形態と第Ⅱ形態では、「個人的消費の全体」は必ずしも積極的に含まれていなかったということになる。確かに、前稿でわれわれが詳しく検討したように、第Ⅰ形態においては、「消費はただ生産的消費として  $G-W < \frac{A}{P_m}$  によって表わされているだけで、……ただ生産的消費が含まれているだけ」<sup>17)</sup> であって、およそ個人的消費に関しては、一方の労働者の「消費そのものは、ここでは、ただ資本による労働力の生産的消費の条件として」<sup>17)</sup> しか示されず、他方の資本家による個人的消費はといえば、もはや「形態的にはそ

のことさえ示されてはいない」<sup>17)</sup>、すなわち「それ自体として見れば、 $G \cdots G'$  という形態は資本家の消費を含むものではなく、明言的にはただ自己増殖と蓄積とを……含むにすぎない」<sup>18)</sup>ものであった。これに対し、第Ⅱ形態は若干趣を異にして、なるほど「全体としての消費」ともかくも内含していることが暗示されていた。けれどもこの循環が発端である前貸資本の生産過程Pから再び生産過程Pへの再存在・更新と復帰の運動であることによって、それは必ずしも、他の資本との絡み合いによる消費の現実的契機を形態上「明言的に」表示したり不可避的に指定するというものではなかった。その意味で、この循環は消費の契機を一般的・抽象的に前提するに留まったといってもよい。前稿で、われわれがこの循環形態を特徴づけて、とくに「過渡的段階の形態」<sup>19)</sup>とした所以である。ところが、これら両循環に反して、形態Ⅲでは「全体としての消費」が積極的に含まれ、「正常な進行の条件」として不可避的に「前提」されている、というのである。してみれば、ここからは直ちに次のような問題がはね返ってくるであろう。すなわち、ではマルクスは、これを、一体どのような論拠によっていかに論証したであろうか、という例の肝腎な問題が、である。これこそが、形態Ⅲの核心的問題にほかならぬ、とは既に再三強調してきたとおりであるが、われわれはいまやその問題へと迫りうる段階に達したのである。ついでしたが、私が上掲(Ⅳ)文の内容に対し「いわば結論を先取りしたかたちで」述べられていた、とあえて記したのもそのためであったが、この文節以降の論述と展開が、ほかならぬ上の問題に正面から挑もうとするマルクスの並み並みならぬ努力と執拗な探究の描出であったことは、これを少し立

ち入って検討してみれば直ちに明らかとなるに違いない。

すなわちマルクスは、上記文言のあと3つの循環の形態上の相違について再度注意を重ねながら、循環Ⅲでは「貨幣に転化されてから、はじめて、この運動は資本の運動と収入の運動とに分かれる」<sup>20)</sup>ことを明らかにして、 $W' - G'$ の完了後に、図のごとく

$$\begin{array}{c}
 \xrightarrow{\text{①}} \\
 W'(W+w) - G' \left( \begin{array}{c} G \\ + \\ g \end{array} \right) - \left( \begin{array}{c} W \\ + \\ w \end{array} \right) \cdots P \cdots W' \\
 \xrightarrow{\text{②}}
 \end{array}$$

「はじめて」分離する資本の運動①と収入の運動②とに主要な関心を向け、ここに①と②の形態転換があらたな問題として、とくに発端の $W'(W+w)$ と流通の第2段階 $G - W$ と $g - w$ によってひき入れられる第2の $\left( \begin{array}{c} W \\ + \\ w \end{array} \right)$ との対峙関係、その転換の意味と素材の相違が中心的問題として積極的に注目されることとなる。なぜならば、 $W' \cdots W'$ 循環こそは、まさに $W'$ をもって発端とするからであり、したがってその性質上総流通 $W' - G' - W$ そのものが、すぐれて考察の主要対象でなければならぬからである。かくして以上のような問題関心から、マルクスは第Ⅲ形態 $W' \cdots W'$ 循環に対して、刮目すべき特性を、あらためて次のように記述するのであった。

(Ⅴ)「 $W' \cdots W'$ では、商品形態にある資本が生産の前提とされている。それは、この循環のなかで第2の $W$ で再び前提として現われる。もしこの $W$ がまだ生産または再生産されていなければ、循環は阻止されているのである。この $W$ は大部分は他の産業資本の $W'$ として再生産されなければならない。この循環では $W'$ は運動の出発点、通過点、終点として存在し、したがって、いつでも存在している。それは再

生産過程の恒常的な条件である」<sup>20)</sup>。

ここであらためて指摘される第Ⅲ形態の特質、すなわちこの循環では「商品形態にある資本」が、発端極とともに、流通の第2段階で現われる「第2のW」としても「生産の前提」でなければならぬという内的論理と、それゆえにこそ「W' は運動の出発点、通過点、終点として存在し」「再生産過程の恒常的な条件」をなすという特性は、いうまでもなくこの形態のみ固有のものである。そして、このような論理と特性の展開にもとづいて、他の産業資本との絡み合いや「消費」の問題に対する論拠が積極的に提示されようとする点、われわれは第Ⅲ形態の核心的特質をなした展開基軸でもあると考える。それは、端的に示せば、 $W' \dots W (= \text{他の産業資本の } W') \dots W'$  (＝他の産業資本のW') $\dots W'$ である。発端極W'が終極W'へと到るまでには、自らと同様の商品資格をもつWを「通過点」で不可避免的に包摂するのでなければならぬ。そこでW'→Wとなる関係が不可欠な条件となる。しかも価値関係および素材形態として両者の対応が  $W' (W + w) = \begin{bmatrix} W \\ + \\ w \end{bmatrix} (P_m + A)$  でなければならぬのである。したがってここに、 $W' (W + w) = \begin{bmatrix} W \\ + \\ w \end{bmatrix} (P_m + A)$

となるための条件、両者の素材的対峙と転換の内容が必然問われねばならぬであろう。かくして、 $W' \dots W \dots W'$ のWの地点で、このWが発端のW'と同一の使用価値形態＝自己の生産物でない限り、必ず流通部面で、他の産業資本のW'と取り替えられてそれを循環内部に引き入れねばならぬ、そのような交換関係が生じ、しかもそれは、使用価値形態の相違によって区別された2つの流通を構成する。以上の事態が、簡潔に次のような文脈で語

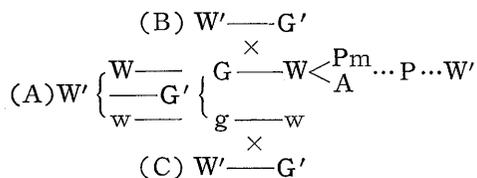
られていたことは周知のとおりである。

(VI)「Ⅲの

$$W' \left\{ \begin{array}{l} W \text{---} \\ \text{---} G' \\ w \text{---} \end{array} \right\} \left\{ \begin{array}{l} G \text{---} W < \frac{A}{P_m} \dots P \dots W' \\ g \text{---} w \end{array} \right.$$

では、Wが循環の外で二度前提されている。一度めは、循環  $W' - G' - W < \frac{A}{P_m}$  で。このWは、 $P_m$ から成っているかぎりでは、売り手の手にある商品である。それが資本主義的生産過程の生産物であるかぎりでは、それ自身商品資本である。またそうでない場合にも、商人の手によっては商品資本として現われる。次にWが前提されているのは、 $w - g - w$ の第2のwとしてであって、このwも、買われうするためには、商品として存在していなければならない。とにかく、商品資本であろうとなかろうと、Aと $P_m$ はW'と同じに商品であって、互いに商品として関係し合う。同じことは、 $w - g - w$ の第2のwについても言える。だから、 $W' = W(A + P_m)$ であるかぎり、それは諸商品をそれ自身の形成要素としており、流通で同等な諸商品によって代置されなければならない。 $w - g - w$ でも、第2のwは流通で他の同等な諸商品によって代置されなければならない<sup>21)</sup>。

形態Ⅲでは「Wが循環の外で二度前提され」、しかも流通部面で互いに「同等な諸商品」として、または「資本主義的生産過程の生産物であるかぎり、それ自身商品資本」として「関係」し合い「代置」されねばならぬのであるから、この場合少くとも2つ以上の産業資本のW'を前提しこれと不可分に絡み合せて、ここに「はじめて」生産的消費と個人的消費（資本家のそれ）とが形態上「明言的に」示され、その結果終極W'への復帰が可能となる。これを図示すれば次のとおりである。



上図でもって説明すれば、(A)の循環運動が資本価値の運動  $W' \text{---} G' \text{---} W \dots P \dots W'$  と収入の運動(資本家の)  $w \text{---} g \text{---} w$  とに「明言的に」分離して循環しうるためには、(B)と(C)などの  $W'$  をその外部に必ず「前提」し、これを流通をとおして(A)自身の循環内部に包摂せねばならぬという点、一目瞭然であろう。しかもここには資本家の消費  $w \text{---} g \text{---} w$  が、(A)の循環運動の一環として資本運動と対当の資格をもって示されてよいことが銘記されねばならない。けだし、形態上  $w \text{---} g \text{---} w$  の「明言的な」表示こそは、循環Ⅲが「商品形態ですでに増殖された資本価値」  $W'$  で開始され、価値としては同等の  $W'(W+w) = \left[ \begin{array}{c} W \\ + \\ w \end{array} \right]$  でなければならぬ関係に由来するからである。これを逆に別言すれば、この  $w \text{---} g \text{---} w$  という消費の積極的な包摂こそ、形態Ⅲが「全体としての消費」を含み、かつその消費の契機を「循環の正常な進行の条件として前提」する所以でもあった、ということができよう。と同時に、ここでは生産的消費と個人的消費とが、使用価値形態上の相違とこれによる社会的総生産物の「分割」をもって判然と区別されることになる。すなわち「一方では個人的消費財源への、他方では再生産財源への、社会的総生産物の分割と、各個の商品資本にとっての生産物の特殊な分割とが、この形態では資本の循環に含まれているのである」<sup>22)</sup>。

以上われわれは、循環Ⅲの核心をなす内的論理を種々検討してきたが、これについて十分な理解がえられているならば、マルクスの以下のような論述はもはや苦もなく諒解されてよい筈

である。

(Ⅶ)「ただこの形態Ⅲの場合にだけ循環そのもののなかで  $W$  が  $W$  の前提として現われるということは、出発点が商品形態にある資本だということによるのである。この循環は、 $W'(\dots)$  が、その生産要素になる諸商品に転換されることによって、開始される。ところが、この転換は、全流通過程  $W \text{---} G \text{---} W (= A + P_m)$  を包括しており、この過程の結果である」<sup>23)</sup>。

さて、上文の含蓄が難なく会得されたならば、ここであらたに論点を転回しよう。というのは、上の「全流通過程」を包括した「この過程の結果」から必然的に帰結する第Ⅲ形態のもう1つの特性を、マルクスが次のように解説して述べていたからである。それも上文(Ⅶ)に直接続けて、である。

(Ⅷ)「だから、ここでは両方の極に  $W$  が立っているが、第2の極、すなわちその形態  $W$  を  $G \text{---} W$  によって外の商品市場から受けとる第2の極は、循環の最終の極ではなく、ただ、循環の最初の2つの段階、すなわち流通過程を包括する段階の最終の極であるにすぎない。流通過程の結果は  $P$  で、次にその機能、生産過程が始まる。生産過程の結果としてはじめて、つまり流通過程の結果としてではなく、 $W'$  は、循環の終点として、そして発端の極  $W'$  と同じ形態で、現われるのである」<sup>23)</sup> と。

じつのところ、循環Ⅲの最終極  $W'$  が「生産過程の結果としてはじめて」発端極  $W'$  と同じ形態に復帰するということが自体は、この形態が  $W' \dots W'$  である以上、いわば当然の理といわねばならない。けれども、他の循環形態と対比してみると、この「当然の理」が斬新で重要な問題点を提起しないであろうか。マルクスが他の循環との比較対照によって、この点を注意深

く示唆して次のように論説しているだけに、注意を要する。

(IX)「これに反して、 $G \cdots G'$  と  $P \cdots P$  では終末の極である  $G'$  と  $P$  は、流通過程の直接の結果である。だから、ここでは、ただ終点で、一方では他人の手にある  $G'$  が、他方では他人の手にある  $P$  が、前提されているだけである。循環が2つの極のあいだで行なわれるかぎり、一方の場合の  $G$  も他方の場合の  $P$  も——他人の貨幣としての  $G$  の存在も他人の生産過程としての  $P$  の存在も——これらの循環の前提としては現われない。これに反して、 $W' \cdots W'$  は、他人の手にある他人の諸商品としての  $W (= A + P_m)$  を前提し、これらの商品は発端の流通過程によって循環に引き入れられて生産資本に転化され、この生産資本の機能の結果として、次には  $W'$  が再び循環の終末の形態になるのである」<sup>23)</sup>。

ここにも、それ自体としてはいかにも「当然な理」が指摘されているといってよい。循環Ⅰと循環Ⅱとはそれぞれ、終末の極では確かに「他人の手にある  $G$ 」と「他人の手にある  $P$ 」とを前提していることに間違いはないし、またマルクスのいうように、「循環が2つの極のあいだ」すなわち中間で「行なわれるかぎり」という仮定を設けるならば、それらが「前提として現われない」こともけだし当然だからである。もっとも、このような「循環が2つの極のあいだで行なわれるかぎり」という想定自体が、よく考えてみるとまことに奇妙でさえある。にもかかわらず、ここでマルクスは、殊更に、この「終末の極」を除外して考えようとし、この仮定の上で循環ⅠやⅡに対する循環Ⅲの特異性を強調する。すなわち他の箇所でも、「終末の極を別とすれば、個別貨幣資本の循環は貨幣資本

一般の存在を前提するものではなく、個別生産資本の循環もすでに循環している生産資本の存在を前提するものではない」<sup>24)</sup>、と同様の趣旨を執拗なほどにくり返し、ただ循環Ⅲだけがこの「終末の極」を除いた場合でも、「他人の手にある他人の諸商品としての  $W (= A + P_m)$  を前提」している、と強調するのである。さてそうすると、おのずから次のような疑問が生じ、われわれの頭脳を縛って離さぬであろう。すなわち、ではいったい何ゆえに「終末の極を別」にするのか、この仮定の含意は何か、要するに「終末の極を別にすれば」ということで、いったいどのような事態が明らかになるというのか、こうした疑問である。先にも述べておいたが、循環Ⅲのこの特異性に、マルクス自身ひどく固執していたふしがあると思えるだけに、疑問は一層つのるのである。けれども、ここ第3章でこうした疑問に対するマルクスの明言的な解答を見出すことは、いささか困難ではないかと思われる。

とはいえ、以上のごとくマルクスによって深く鋭く究めつくされてきた第Ⅲ形態の内的論理の彫琢を、いま一度入念に省察してみるならば、われわれはこの疑問に対し必ずや充分な論拠をもって、一層発展的に展開された解答を示すことも可能ではあるまいか。そして恐らくこの問題の解明は、形態Ⅲの特有な性格を真に理解するうえでも極めて重大であると思われる。けだしそれは、われわれが本稿の冒頭で示唆しておいた問題——すなわち  $W' \cdots W'$  循環の展開が「総体としての流通」を形成せずにはやまぬという、その論理を積極的に問う問題と深くかかわっているように考えられるからである。とまれ一言前もって注意を喚起しつつ、節を移してわれわれの積極的な見解を述べることにし

よう。

註

- 1) K. Marx, *Das Kapital* Bd. II. S. 82.『資本論』国民文庫版(大月書店)(5), 138ページ。
- 2) *Ibid.*, S. 24. 同上書, 46ページ。
- 3) G...G' 循環の G—W に関するこのような考察の主眼点が、次のように指摘されていた。すなわち G—W は、それ自体としては一般的商品流通の過程でありながら、「このような、一般的商品流通の過程を、同時に一つの個別資本の独立の循環における機能的に規定された一つの区切りにするものは、さしあたりまず、この過程の形態ではなく、その素材の内容であり、貨幣と入れ替わる諸商品の特殊な使用性質である」(*Ibid.*, S. 24. 同上書, 46—47ページ) というように。
- 4) *Ibid.*, S. 32. 同上書, 60ページ。
- 5) *Ibid.*, S. 33. 同上。
- 6) *Ibid.*, S. 84. 同上書, 140ページ。
- 7) *Ibid.*, S. 88. 同上書, 149ページ。
- 8) *Ibid.*, S. 88. 同上。
- 9) *Ibid.*, S. 93. 同上書, 157ページ。
- 10) *Ibid.*, S. 52. 同上書, 92ページ。
- 11) G...G' 循環では、ただ生産的消費だけが含まれるという点は、次のように明記されているが、前稿ではわれわれもこの循環の「刮目すべき特徴」をなすものとして重視した。前掲拙稿, 257 ページ。「消費はここではただ生産的消費として  $G—W \begin{cases} P^m \\ A \end{cases}$  によって表わされているだけであり、個別資本のこの循環のなかにはただ生産的消費が含まれているだけである」(*Ibid.*, S. 54. 同上書, 92ページ)
- 12) *Ibid.*, S. 93. 同上書, 157ページ。
- 13) *Ibid.*, S. 82. 同上書, 138—139ページ。
- 14) 前掲拙稿, 260—262ページ参照。  
P...P 循環が他の資本の存在を「前提」とし、これに「制約」されているという点の暗示は、例えば「W'—G'—W が行なわれるためには、W' が転換されるWの現実の再生産が必要である。しかし、この再生産は、W' で表わされる個別資本の再生産過程の外にある多くの再生産過程によって制約されているのである」(*Ibid.*, S. 69. 同上, 118—9ページ) という指摘によっても明らかであるが、しかしこれが、形態上直接明示される W'...W' 循環とは異なっている点で、前稿では「一般

的・抽象的な措置」としたのである。

- 15) *Das Kapital*, Bd. II. S. 83. 前掲書, 139—40ページ。
- 16) *Ibid.*, S. 89. 同上書, 149—150ページ。
- 17) *Ibid.*, S. 54. 同上書, 93—4ページ。
- 18) *Ibid.*, S. 45. 同上書, 80ページ。
- 19) 前掲拙稿, 262ページ。なお前注14) 参照。
- 20) *Ibid.*, S. 89—90. 同上書, 150—151ページ。
- 21) *Ibid.*, S. 91. 同上書, 152—153ページ。
- 22) *Ibid.*, S. 89. 同上書, 150ページ。
- 23) *Ibid.*, S. 91—92. 同上書, 154ページ。
- 24) *Ibid.*, S. 91. 同上, 152ページ。

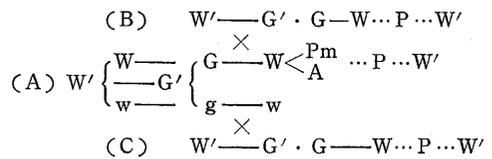
(C) 商品資本循環と社会的総資本

さきにわれわれは、前掲(VIII)文と(IX)文のなかで、第I循環と第II循環では最終極G'およびP(P')がともに「流過程の直接の結果」であったのに対して、第III循環の場合には「生産過程の直接の結果としてはじめて」終点W'に帰着するという、両者の対照的相違が明らかにされていたことを、指摘しておいた。いったい、この相違は何を意味するのであろうか。われわれはまずこの点を明らかにして、上記の疑問に答えるための手がかりを求めてはどうであろうか。

さてそうすると、循環Iと循環IIの場合、終極段階はともに流過程で、しかもそれ自体としてみれば単に一般的商品流通の事象なのだから、あえて極論すれば、前にも関説したように、とくに「他の資本」たる産業資本の存在と循環を外部に措定し、また自らの循環運動の不可欠な条件として前提する、といった関係には必ずしもなかったといってよい。(ただし、循環IIの場合にはそれが暗示されてはいた、という点は以前に、また前稿でも言及しておいた。)だからこそまた、この極端な想定が、ひるがえって発端極のGとPのそれぞれに対しても、いわば「循環IではGが、IIではPが、それぞ

れ、歴史の舞台に登場する最初の貨幣資本、最初の生産資本でありうる<sup>1)</sup> という、これまた極言ではあるが、そうした規定をなさしめることにもなったのであろう。ところが、循環Ⅲではこれに反して、終末段階が生産過程であり、しかも資本の生産過程による「直接の結果」としての終点  $W'$  であることによって、こうした関係が、ひるがえって発端極をも反省規定して、発端の  $W'$  が既にそうしたものであることを、すなわち資本の「生産過程の直接の結果」たる商品であることを反転的に確認し、というよりも  $W' \dots W'$  循環の全体運動そのものによって一層——というのは、もともとこの循環が生産過程の「結果」既に増殖された資本価値の商品形態でもって開始されることを、その成立の根拠とも特徴ともするのであるから、なお一層——再確認されるのであって、その意味では、仮りにも「歴史の舞台に登場する最初の商品資本」である、などとはおよそいえない性質のものといわねばならない。このように両者の対照的相違についてひとまず考えてよいとすれば、循環Ⅲのこの性質が、「循環の正常な進行の条件」たる「消費」として欠くべからざる存在であるところの、他の産業資本の  $W'$  に対しても全く同様に妥当するといつてよいであろう。つまり先の図示にしたがえば、(B)と(C)の各資本が売りにだす  $W'$  は、その存在そのものが既に生産過程の「結果」による産物であったことを反省規定的に示唆し、またそれゆえに後続しては生産過程を内含するところの、循環的運動  $W' \dots W'$  を(B)と(C)それ自身が構成せざるをえないものとなる。そしてじつは、こうしてこそはじめて、(A)そのものもまた、「正常な」しかも「恒常的な再生産」の循環的運動形態となりうるであろう。けだし、(A)

の再生産的循環運動にとっては、(B)や(C)などの  $W'$  が単に存在するというだけに留まらず、否それらが「恒常的に」存在するためにも一層展開されて、現実的には(B)と(C)自身をも(A)と同様な  $W' \dots W'$  の循環運動を構成することが必須の条件とならざるをえないからである。この関係をさきにならって図示すれば、次のとおりである。



ここには(A)の  $W' \dots W'$  という再生産の恒常的な循環運動が、(B)や(C)にも反射規定して同種の循環形態を要求する関係にあり、こうして(A)という個別の商品資本の循環は、既に循環している他の個別的商品資本の循環(B)と(C)の存在を前提とし、また包括することになる。端的にいえば、 $W' \dots W'$  循環とは、その「正常な進行」のためには、他の  $W' \dots W'$  循環をもそれ自身のうちに前提するものである、と言い換えてもよい。こうした反射規定的相互関係の展開は、およそ循環ⅠやⅡの場合、そこに内的論理の存存しないこというまでもない。かってマルクスは、前掲(Ⅶ)文で次のように述べていた。「ただこの形態Ⅲの場合にだけ循環そのもののなかで  $W$  が  $W$  の前提として現われる」と。この文意は既にわれわれの熟知するところであるが、ここにいう「 $W$  が  $W$  の前提として現われる」という関係を、一層展開して、われわれは「 $W' \dots W'$  が他の  $W' \dots W'$  を前提とする」と解し、こうした発展的事態を強調したのである。そこで、この事態を指して、とくに第Ⅲ形態  $W' \dots W'$  の内的

論理の展開、あるいは展開された第Ⅲ形態と命名しよう。

さて、このような第Ⅲ形態の展開、つまりは (A) に対応する (B), (C) などの  $W' \dots W'$  としての展開は、当然にも拡大されて、(B), (C) に対応する他の個別的商品資本の循環  $W' \dots W'$  の存在をも同じく前提して包括すること

$$\begin{aligned}
 (A) \quad & W' - G' \cdot \left[ \begin{array}{c} G \\ g \end{array} \right] \text{---} \left[ \begin{array}{c} W \\ w \end{array} \right] \dots P \dots W' \\
 (B), (C) \quad & W' \text{---} G' \cdot \left[ \begin{array}{c} G \\ g \end{array} \right] \text{---} \left[ \begin{array}{c} W \\ w \end{array} \right] \dots P \dots W' \\
 (D), (E) \quad & W' \text{---} G' \cdot \left[ \begin{array}{c} G \\ g \end{array} \right] \text{---} \left[ \begin{array}{c} W \\ w \end{array} \right] \dots P \dots W' \\
 (F), (G) \quad & W' \text{---} G' \cdot \left[ \begin{array}{c} G \\ g \end{array} \right] \text{---} \left[ \begin{array}{c} W \\ w \end{array} \right] \dots P \dots W' \\
 (H), (I) \quad & W' \text{---} G' \cdot \left[ \begin{array}{c} G \\ g \end{array} \right] \text{---} \left[ \begin{array}{c} W \\ w \end{array} \right] \dots P \dots W' \\
 & \cdot \\
 & \cdot \\
 & \cdot \\
 & \cdot \\
 & \cdot
 \end{aligned}$$

以上われわれは、前項 (B) の末尾で提起しておいた疑問、すなわち「終末の極を別にすれば」という例の想定の意味を追究して、じつは  $W' \dots W'$  循環が他の  $W' \dots W'$  循環を前提するという一層展開された論理を明らかにし、これが拡大されては「総体としての流通」を形成する論拠であることをも示し、かくして  $W' \dots W'$  循環にとって条件である「全体としての消費」、つまりは生産的および個人的消費 (少くとも  $w - g - w$ ) がこうした社会的流通の諸関連=個別的商品資本の相互的連鎖の關係に媒介されねばならぬ事態をより一層明確にしえたかと思える。前項で、「充分なる論拠をもって一層展開

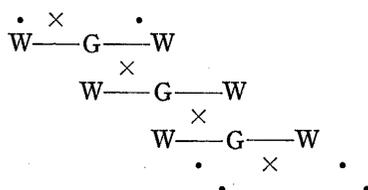
不可避であろう。こうして、以下同様な事態の進展が続行し、個別の諸資本は  $W' - G' \cdot G - W$  の流通過程において相互に絡み合い、社会的連鎖の態容にまで開展して、ここに社会的流通の総体運動を形成すること、いまや明らかであろう。簡単のため (B), (C) を一括して、この拡大された連鎖の態容を示せば、

された解答」と強調した所以である。だが、事態はさらに旋回して発展する。すなわち社会的総流通過程  $W' - G' - W$  において互いに絡み合う諸資本の連鎖關係が、次に反転しては (A) 自身の総流通  $W' - G' - W$  の第1段階  $W' - G'$  に対しても同様の關係を反射して、この段階が、今度は他の個別的商品資本の循環  $W' \dots W'$  による連鎖系列の特殊的1段階であることを示すであろう。つまりは (A) の発端流通  $W' - G'$  をも、社会的連鎖關係のなかの特殊的流通段階たらしめるのである。こうして上図は、さらに発展した形式を示す。より単純な形で描けば、

$$\begin{aligned}
 (Y) \quad & W' \overset{\times}{-} G' \cdot G \text{---} W \dots P \dots W' \\
 (Z) \quad & W' \overset{\times}{-} G' \cdot G \text{---} W \dots P \dots W' \\
 (A) \quad & W' \overset{\times}{-} G' \cdot G \text{---} W \dots P \dots W' \\
 (B), (C) \quad & W' \overset{\times}{-} G' \cdot G \text{---} W \dots P \dots W' \\
 (D), (E) \quad & W' \overset{\times}{-} G' \cdot G \text{---} W \dots P \dots W'
 \end{aligned}$$

この図示において、(A) の  $W' \dots W'$  が、(B), (C), (D) など他の  $W' \dots W'$  を前提してそれらの連鎖関係をつくりだし、他方ひるがえっては (Z) や (Y) 等々の前提でもあるということによって、ここにはじめて「総体としての流通」すなわち「社会的総資本の流通運動」=「産業資本の全体運動」が形成されうることになり、そしてこの形成によって、(A) は「全体運動」のなかの、今度は「一つの部分運動」であることをみずから立証するという関係が、鮮かに描出されているであろう。かくして、「個別的諸資本の循環は、互いにかみ合い、互いに前提しあい、互いに条件をなしあっているのであって、まさにこのかみ合いのなかで社会的総資本の運動を形成する」<sup>2)</sup> 事態が第Ⅲ循環の内的論理の一層の展開によって、いまや明瞭に論証されたといつてよい。こうした個別と総体との関連に限っていえば、それは単純な商品流通の事象と同様の関係にあるということができよう。ここで、本稿の冒頭に掲げておいた拙文が想起されてよい。「われわれは『資本論』第1巻における商品流通の展開論理を識っている。商品流通  $W-G-W$  とは、個々の商品交換を契機としてはじまる過程が、社会的連関運動にまで開展して「総体としての流通」を形成する」と。端的にいって、交換が個別を社会的総体にまでもたらすのである。図

示すれば、周知のように



であり、これを上図と対照すれば、事態は一目瞭然であろう。すなわち「単純な商品流通の場合には1商品の総変態が商品世界の諸変態の列の一環として現われたように、ここでは(われわれの場合では上掲の図) 個別資本の変態が社会的資本の諸変態の列の一環として現われる」<sup>2)</sup> という事態が、である。そして、こうした類似性を端的に、より鮮明に表現するものこそ、循環ⅠでもあるいはⅡでもなく、じつに循環Ⅲの形態的特質であったことは銘記されてよい。

けれども、両者の類似性は、あくまでも流通過程の単なる転態運動についてだけいいうる事柄であった。そこで、この総流通がほかならぬ「産業資本の全体運動」を構成することによって、問題があらためて次のように提起されるのである。

(X) 「循環  $W' \dots W'$  は、その軌道のなかで  $W (= A + Pm)$  の形態にある他の産業資本を前提する……からこそ、この循環自体が次のことを要求するのである。すなわち、これを循環の

一般的な形態として、すなわち各個の産業資本が（それが最初に投下される場合を除き）そのもとで考察されうるような社会的な形態として、したがってすべての個別産業資本に共通な運動形態として、考察するだけでなく、また同時に、諸個別資本の総計すなわち資本家階級の総資本の運動形態として、すなわち、そこでは各個別産業資本の運動が他の部分運動とからみ合い他の部分運動によって制約される一つの部分運動として現われるにすぎないような運動として、考察することを要求するのである<sup>3)</sup>。

循環  $W' \dots W'$  が「その軌道のなかで  $W$  の形態にある他の産業資本を前提」し、さらに展開されては、 $W' \dots W'$  を行う他の産業資本を前提し包括するという一層明白な論拠にもとづいて、「社会的総資本の全体運動」を形成し、そして今度は形成されたこの「全体運動」が、逆に個別資本の  $W' \dots W'$  を規定してこれを社会的総資本の運動のなかの「一部分運動」＝「一環」たるものとして証明する、といった関係は既に明らかにしたとおりである。そこで問題は、こうした  $W' \dots W'$  を「諸個別資本の総計すなわち資本家階級の総資本の運動形態」を表示するものとしてあらためて認識し、且つそうしたものとして考察しなければならぬ、否「この循環自体」がそのような考察を「要求」する、というのである。しかもこのような問題の考察は、 $W' \dots W'$  を「循環のただ一般的な形態として、……したがってすべての個別産業資本に共通な運動形態として考察するだけではない」ことに特別な注意が促がされるのである。もっともこのような、「すべての産業資本に共通な運動形態」という意味でいうならば、循環ⅠもⅡもそれぞれに「一般的形態」でありうるし、また「社会的資本の形態とみなされうる<sup>4)</sup>

としても何らさしつかえはない。循環ⅠやⅡは、それらが産業資本の現実の総循環運動からそれぞれ独自の視角によって補捉された一面的形態をあらわす限りでは確かに特殊の循環でありながら、しかしこれら特殊の循環の形態が全ての産業資本の現実の転態運動のなかに共有されているという意味では、同時に「一般的形態」でもありうるし「社会的資本の形態」とすることもできるからである。そしてこのような、「特殊的」であると同時に「一般的」でもありうる各循環の同時的存在が、現実の産業資本の総循環運動、とくに生産の連続性を追求する産業資本の総循環姿態において確証されうることの考察は、周知のように後続する第4章の総括すべき課題であった。ところが、循環  $W' \dots W'$  はそのような意味での「社会的資本の形態」としてだけではなくて、それ以上に、拡大された独自の「考察」への展望を拓くものであるという。

このような拡大された問題の「考察」とは、いうまでもなく、個別産業資本の運動が社会的総資本の運動形態に総括されてその「一部分」であるという観点から、「この部分運動が他の部分運動とからみ合い他の部分運動によって制約されて……現われるにすぎないような運動<sup>5)</sup>」について、つまりは「この部分運動」を「社会的資本の他の諸部分の運動との関連において考察<sup>6)</sup>」することであり、したがってこの問題は、当然にも「個々の個別資本の循環の考察では解決されず、そのような考察では解決が前提されていないような諸問題<sup>6)</sup>」であるとして、その積極的な考察を事実上第3篇の「社会的総資本の再生産と流通」へとゆだねるに至ったことは周知のとおりである。そしてこの著名な第3篇は、あらためて述べるまでもな

く、以上のような社会的総資本に関する考察が、社会的商品資本すなわち総商品生産物の価値成分  $W' = c + v + m$  への総括と社会的生産の二部門構成とをもってする、いわゆる再生産表式の展開によって遂行されている点、その比類なき問題提起とともに、斬新な着想と深い含蓄をもつ理論内容とにおいて、『資本論』中でも、否、古今の学説史上でもひとときわ卓越した光彩を放つ箇所であるが、それだけに、多くのすぐれた研究がこれまでも累々と加えられてきたことは同様に周知のとおりでもある。従来よりこれほどまでに多くの貴重な研究成果の累積を知らないこの第3篇の検討は、われわれにとっても果さねばならぬ必須の課題であるが、そのためにも、ここではまず、この篇の考察対象が  $W' \dots W'$  循環の展開形態をもって開示されているという事情からして、つまり一言でいえば、個別的諸資本の「部分運動」が相互に連鎖し合って形成する社会的総資本の再生産過程に関する考察であり、それは同時に、社会的総資本の構成部分としての個別的諸資本の「部分運動」が「他の部分運動」によって「制約」される関係の解明でもあるという問題の性格からいって、このような  $W' \dots W'$  循環にある個別的見地と社会的総体の見地について、あるいは「他の部分運動」といわれるものの含意や意義について、この際明らかにしておくことが必要かと考えるのである。この論題はしたがって当然、同じく  $W' \dots W'$  としながらも、第1篇循環論と第3篇社会的総資本論の見地との異同について具体的に問うことと同じであり、さらにいえば、総じて第1篇資本循環論における展開論理と第3篇「社会的総資本の再生産と流通」論との関連性如何——もしあるとすれば——という、きわめて深刻な、そしてあたらしい問題の提起を

意味するであろう。従来、両篇の関連性については、むしろその差違を強調する見解は多々あったが、両篇の積極的な結びつきを、すなわち両篇の有機的関連性を正面から問い質す問題関心はほとんどなかったように私には思われる。それだけにまた、この論題は事柄の性質上まことに重要であるといわねばならない。と同時に、それはまた恐らく、第3篇に関する従来輝かしい研究成果を踏襲した上で、なお残された観点がもしあるとすれば、そのあらたな問題観点に対しても若干の示唆を与えてくれるに違いない。こうして問題はますます遠大となり、われわれの問題展望もまた拡大せずにはいない。いったい、 $W' \dots W'$  循環の孕む個別と総体との立場において、何が含まれそして何を欠くのか、これが明らかになった上で、では第1篇循環論と第3篇社会的総資本論とはどのように結びつくというのであろうか。

#### 註

- 1) Marx, *Das Kapital*. Bd. II. S. 91. 『資本論』前掲同書、152ページ。
- 2) *Ibid.*, S. 355. 同上書、(7), 11ページ。
- 3) *Ibid.*, S. 92. 同上書、(5), 155ページ。
- 4) *Ibid.*, S. 56. 同上、97ページ。
- 5) *Ibid.*, S. 92. 同上、155ページ。
- 6) *Ibid.*, S. 93. 同上書、156ページ。

#### (D) 資本循環論と社会的総資本論

われわれはこれまで本稿において、循環Ⅲの検討を、文義的詮索をもあえて加えて詳細に行なってきたが、これら一連の論述をいまふりかえてみて、じつはいままで伏せられてきた論点のあることに、まず読者の注意を喚起しなければならない。というよりも、上記の遠大な問題に答えるためには、どうしてもこの点に言及しないわけにはゆかぬのである。それは、ほか

でもなく労働者階級の個人的消費  $A-G-W$  に関する問題であり、この所得流通が社会的再生産のなかで占める位置や役割について、これまで何ら触れられることなく終始してきたという点である。もっとも、これは故意にそうしたわけのものではないのであって、 $W' \dots W'$  の特性がここ第1篇資本循環論の見地から、つまりは個別的資本の立場によって考察される限りでは少なくともそうならざるをえなかったといえる。こうしてみるとわれわれは、この労働者階級の所得流通  $A-G-W$  が、第1篇循環論全体のなかでどのように取り扱われていたかについて、ともかくも明らかにしておく必要がある。そしてこれが明確になれば、上記の問題、第1篇と第3篇との関連性如何という問題が一層具体的な内容をもって理解されてくる筈である、ということにも前もって注意を促しておきたい。

さて、本稿をもってこれまで検討してきたように、第1篇循環論における  $W' \dots W'$  の考察では、発端極が  $W'$  であることによって、確かに「消費が資本そのものの循環の正常な進行の条件として前提されている」のであったが、その際の「消費」とは、一方で資本価値の循環  $W'-G'-W \dots P \dots W'$  の  $P$  の過程に包摂される生産的消費のことであり、他方では「収入としての剰余価値の支出がこの循環に含まれるかぎり、それには個人的消費も含まれている」<sup>2)</sup>といわれるように、剰余価値の循環  $w-g-w$  によって明示される資本家の個人的消費を意味するものであった。むしろこの循環が形態上「明言的に」示しうるのは、以上のような「消費」についてであったといった方がよい。これに対して労働者の個人的消費は、少なくともこの形態には含まれていない、というよりもこの形

態では直接には示されえないものとなっている。むしろ第1篇循環論の立場からは、労働者の個人的消費は、生産要素たる労働力の生産として事実上生産的消費のなかに含まれてしまうのである。すなわち「労働力はある限界内では労働者の個人的消費の不断の生産物なのだから」<sup>2)</sup>という理由でもって、そうみなされるのである。そしてこの生産的消費なるものの性格は、いうまでもなく「消費のための生産」や「生産そのものを過程の目的として示すこと」では決してなく、「消費される商品を媒介として剰余価値がつくられること」<sup>3)</sup>を意味しており、したがってこのような剰余価値の生産を条件とする生産的消費のための交換や流通は——それ自体としてみればなるほど単純な商品交換の事象でありながら、しかしこの——一般的商品流通へと解消されてはならぬ性質のもの、すなわち、すぐれて資本の流通に属するといった事柄は、第1篇の循環論がそのすべてにわたって、とくに  $G \dots G'$  と  $P \dots P$  の循環がその形態上積極的に表示する内容であった。かくして資本循環論では、この「生産的消費は、それぞれの個別的資本自体によって行なわれる」<sup>2)</sup>ほかに、そのような見地から、各循環形態の内部に生産的消費がいかに包摂されているかを明らかにして、生産的消費の条件や前提が問われるのであって、そこに資本循環論の一貫した論理があったといえるであろう。

ところがこれに反して、個人的消費については、その「全体をなしている」「労働者の個人的消費と、剰余生産物中の蓄積されない部分の個人的消費」<sup>2)</sup>すなわち  $A-G-W$  と  $w-g-w$  とは、既にみたように  $W' \dots W'$  循環ではただ後者のみが「明言的に」示されていて、前者はその所を得ることさえかなわぬのであった。

しかも、労働者の個人的消費がこのように循環形態のうちに包含されていらないのは、この第Ⅲ形態に限らず、第Ⅰ形態や第Ⅱ形態とても同然であったという点は注意されてよい。これに関しては前稿で詳しく考察したのでここではただ要約だけに留めるが、労働者の所得流通  $A-G-W$  は、その第1段階  $A-G$  が個別資本の行為  $G-A$  によって資本循環のうちに含まれる——そしてこの交換の資本主義的内実を端的に表現するものこそ、ほかならぬ  $G \cdots G'$  循環の特性であった、という点は前稿でもとくに強調しておいた——、というよりもこの労働力の購買なる資本の側の行為  $G-A$  を唯一の契機として派生するのであるが、しかし「第2の段階  $G-W$  は、もはや個別資本の循環にははいらない」ものであった。すなわち「労働者の消費を含む労働者の流通  $A-G-W$  のうちでは、第1の環だけが  $G-A$  の結果として資本の循環にはいる。第2の行為  $G-W$  は、個別資本の流通から出てくるのではあるが、この流通にははいらない<sup>3)</sup>」のである。してみれば、資本価値の変態とその循環運動を「純粋に」把握しようとする資本循環論は、そのすべての形態をもってしても、労働者の個人的消費の全契機を包摂することができず、したがってこの消費の再生産上における位置や役割を「明言的に」示すこともできないのであって、むしろこれを個別資本の流通・循環運動の外部に、いわば「疎外」したかたちで前提するものでしかなかったといわねばならない。そして資本の循環運動がもしこれを自己の内部にとりこむときには、先にも一言触れたように、「ただ資本による労働力の生産的消費の条件として<sup>4)</sup>」だけの意味に限られるのであって、この点とくに  $G \cdots G'$  循環がその特性として如実に語るところでもあ

た。このようにみえてくるならば、労働者の個人的消費を以上のように捉えて——すなわち資本の循環運動からの「疎外」と剰余価値生産のための不可欠な「条件」として——位置づけるところに、資本循環論の立場、 $A-G-W$  に対するその独自の視角があったときえいうこともできるであろう。だがこのことは裏をかえして別言すれば、この資本循環論は、労働者の所得流通  $A-G-W$  の地位や役割を、むしろ以上のようなものとしてしか示すことができないものでしかなかったということを意味するであろう（続く第4章の「循環過程の三つの図式」において、この事情が一層明瞭に指摘されていることに注意を促しておきたい）。こうして資本循環論では、要するに労働者の個人的消費の流通、すなわち  $A-G-W$  が再生産上において占める役割や意義、その地位といったものの充分な把握には到底いたり得ぬ限界があったといわねばならない。

だが労働者階級の個人的消費は、これを媒介する全流通契機がたとえ第1篇における資本の循環的運動の視角からは直接捕捉されることなく、その外部に前提されているものであったとはいえ、否じつは個々の資本の循環運動の圏外に放置され前提されるという循環論の立論見地によって逆に、これがじつは社会的行為として営まれることを意味し、したがってその所得流通  $A-G-W$  が社会的行為として社会的流通運動のなかの重要な構成要素となり、資本の流通・循環運動の外側で、だがこれとあいまって社会的流通の総体を構成する関係にあるということをかえって認識させてくれるのである。そしてこうした点に、逆説的ではあるが、資本循環論の秘められた含蓄を看み取ることもできよう。資本循環論の見地から個人的消費を、とく

に労働者の消費についてその地位を示唆するかのごとくに、次のマルクスの慎重な発言は読みとれるからである。以前の引用と重複するところもあるが、全体の関連を理解する上からもあえて全文を記載しておこう。

(XI)「生産的消費（これには事実上労働者の個人的消費が含まれる、というのは、労働力はある限界内では労働者の個人的消費の不断の生産物なのだから）は、それぞれの個別資本自体によって行なわれる。個人的消費は——個別資本家の生存に必要なもののほかは——社会的行為として前提されているだけで、けっして個別資本家の行為として前提されているのではない<sup>5)</sup>。

ここに述べられている、「個人的消費は社会的行為として前提されている」とは何を意味するか、もはや明らかな筈である。

さて、以上これまでの検討と論述によって、読者は既に次のことを察知されているであろう。すなわち労働者階級の所得流通をも含む社会的流通運動の総体とは、前項(C)でその特性をつぶさに追究した、 $W' \dots W'$  循環の展開された形態たる「社会的総資本の運動形態」を措いて以外にはありえないということ。むしろ正確には、個別的諸資本の循環  $W' \dots W'$  が絡み合って社会的総体にまで総括されるならば、そのとき、この社会的総資本  $W' \dots W'$  の内部には労働者の所得流通もまた一つの「部分運動」として包摂されねばならぬ関係にあった、といった方がよい。かくして、個別的諸資本の「総計」をもって構想された「社会的総資本の運動形態」こそは、既に明らかにしたような個々の資本の絡み合い＝資本流通と資本家の所得流通  $w-g-w$  とを内包しているばかりではなく、じつに労働者の所得流通をも「他の部分運動」

として内部に包括した上で構成されているものであった。そこで次のように言うことが許されよう。つまり「社会的総資本の運動形態」は、第1篇循環論では第Ⅲ形態  $W' \dots W'$  の内的論理の展開によってその成立を一旦は確証されながら、にもかかわらずそのなかには労働者階級の消費の問題を循環論の論理からして当然ながら含みえず、その埒外に置かざるをえなかったのであるが、そしてそこに循環論の見地の限界があったとってよいが、しかし本来的には彼等の消費もまた総運動の内部における必然的契機として含まれうるものなのであって、じつはこうして成立する本来的意味での「社会的総資本の運動形態」が、続く第3篇での「研究の対象」として引き継がれていくのである<sup>6)</sup>、と。ここに、第3篇の冒頭「緒論」のなかの、ほかならぬ「研究の対象」において、マルクスが社会的総資本の総流通過程の構成内容を明快に規定して、次のごとく述べていたことが想起されるのである。

(XII)「この総過程は、生産的消費（直接的生産過程）とそれを媒介する形態転化（素材的にみれば交換）とを含むとともに、個人的消費とそれを媒介する形態転化すなわち交換とを含んでいる。それは一方では、労働力への可変資本への転換を、したがって資本主義的生産過程への労働力の合体を含んでいる。ここでは、労働者は自分の商品である労働力の売り手として現われ、資本家はその買い手として現われる。しかし、他方では、商品の販売のうちには、労働者階級による商品の購買、したがってその個人的消費が含まれている。ここでは、労働者階級は買い手として現われ、資本家は労働者への商品の売り手として現われる。

商品資本の流通は剰余価値の流通を含み、し

たがって、資本家の個人的消費すなわち剰余価値の消費を媒介する売買をも含んでいる。

したがって、社会的資本として総括された個別的諸資本の循環、つまりその全体からみたこの循環は、資本の流通だけではなく一般的な商品流通をも包括しているのである<sup>17)</sup>。

この長文の引用において、われわれはここに、社会的総資本の総流過程が3つの流通運動を、すなわち生産的消費を媒介する流通と個人的消費を媒介する所得の流通  $A-G-W$ ,  $w-g-w$  を含み、前者が「資本の流通」であるのに対して後者が「一般的な商品流通」をなすという意味でそれぞれ独自の流通を形成しながらも、同時にそれらが交互に一方では商品の「売り手」として、また他方では「買い手」ともなって不可離に結びつく社会的再生産の営み——これが「社会的総資本の再生産と流通」の過程として現われるのだが——を識ることができるのである。このように再生産における生産的消費と個人的消費とを媒介する流通が互いに絡み合って社会的再生産の全体運動を構成し、そしてそのなかで両者のあいだに一定の社会的連繫をつくりだす態容の解明こそは、ほかならぬ第3篇の課題とするところであり、例の再生産表式はそのために必要とされたのである。再生産表式が  $W' \dots W'$  に立脚するのも、「商品資本の運動は、生産的消費とともに個人的消費をも含んでいる<sup>18)</sup>」からであった。社会的総資本としての商品資本、すなわち社会的商品生産物  $W'$  がその価値成分  $c + v + m$  に総括されるならば、そのなかで、生産的消費と個人的消費とを媒介する流通のためには使用価値形態上の区別が社会的に要請され、社会的生産における2部門分割が必然となる。こうして、社会的総資本に包括される3つの流通運動の相互的絡み合

いの関係と一定の量的連関性とが、このような社会的総商品資本の価値成分  $W' = c + v + m$  への総括とこれにより必然となる2部門分割とで構成された再生産表式を用いて、まさに一望のもと簡潔に説明されうることになるであろう。だがそれはともかく、再生産表式のこうした含蓄については後ほど詳しく考察することにして、いまここで銘記すべきことは、以上述べてきたような第3篇の「研究の対象」や「問題の提起」に込められているその問題意識や問題の所在である。じつはマルクスもまた第3篇の20章「単純再生産」で、表式による説明を本格的に始める前に、問題の所在とその性格を次のように再確認していたほどであった。要約的に記しておけば、

(XIII) 「総再生産過程は、ここでは、資本そのものの再生産過程を含んでいるのと同じように、流通に媒介される消費過程をも含んでいる」、「かの生産要素（生産的消費のための——筆者挿入）は、それが物的性質のものであるかぎり、それと交換されそれによって補填される個別完成生産物と同様に、社会的資本の一成分をなしている。他方、社会的商品生産物のうちの労働者がその労賃の支出によって消費し資本家が剰余価値の支出によって消費する部分の運動は、総生産物の運動の不可欠の一環をなしているだけでなく、個別的諸資本の運動とからみ合っており、したがってその過程は（資本循環論の場合のように——筆者挿入）単にそれを前提することによっては説明されえないのである」。それゆえに、われわれの「すぐ目の前にある問題」とは、「生産で消費された資本はどのようにしてその価値を年間生産物から補填されるか、また、この補填の運動は資本家による剰余価値の消費および労働者による労賃の消費とど

のようにからみ合っているか? である』<sup>9)</sup>と。

ここでも3つの流通運動が指摘され、社会的再生産におけるそれらの絡み合いが「目前の問題」として強調されている。わけてもA—G—Wによる「労賃の消費」が「生産で消費された資本」の補填にとって重要な役割を演ずる点の問題指摘は、われわれの関心からいってとくに留意されてよい。なぜなら、そこにわれわれは第1篇循環論には欠けていた第3篇社会的総資本論の理論的前提とその「対象」の最たるもののあることを識るからである。したがってまた、個別の立場と社会的総体の立場との内容構成上の相違が何であったか、判然とするからである。それは、一言にしていえば、これらの立場がA—G—Wという労働者階級の個人的消費に関する問題を包括しうるものであったか否か、あるいは同じことだが、A—G—Wの全流通が社会的再生産において占める意義や役割を十分に解明しうるものであったか否か、ということに帰着するであろう。

さて、では以上のような内容上の差違を確認した上で、今度は、われわれのいう第1篇循環論と第3篇社会的総資本論とはいったいどのような有機的関連性をもつというのか、この至難な問題が明らかにされねばならない段階に達した。以前にわれわれは、この種の論題が深刻な意味と至大な意義とをもつに違いないと強調し、しかも従来のマルクス再生産論の研究において若干欠けるところのあった問題関心ではなかったであろうか、ということをも指摘しておいた。だがじつは問題の解答は、これまでの考察によって既に与えられているということに、賢明な読者は恐らく気づかれているであろう。というのは、この種の問題が従来不問に付せられてきたについては、ほかならぬ第1篇循環論

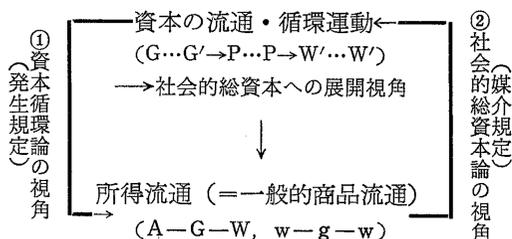
に内在する深遠な論理が必ずしも明確ではなかったからであって、これを理解するならば、そこにはおのずから、問題に対する解答が用意されていたとってよいからである。第1篇循環論がその全体をもってまず第一に究明しようとする肝腎な課題、その内的論理とは何であったか、これについてわれわれは既に幾度もくり返し強調してきたが、本稿の冒頭でも次のように述べておいた。

「それは、G…G' から始まって P…P へ、さらに W'…W' へと赴く「姿態進展」のなかに貫通して示される資本の流通諸態様、つまりは生産的消費と個人的消費とを媒介するさまざまな流通諸契機についてその論理や含意を解明し、その上でこうした「姿態進展」による流通諸契機の全体をとおして「資本の流過程」とは、要するに再生産を媒介するところの、まさに再生産過程の媒介的運動態様にほかならぬことを明らかにするものであった」、と。同じ趣旨を他の箇所では次のようにも述べておいた。

「資本循環論では、3つの循環がその「姿態進展」をとおして、それぞれ生産的消費の契機と個人的消費の契機とをいかに包摂しているかを具体的に問うことによって、生産と消費の過程的運動連関とその社会的性格とを明らかにし、もって「資本の流過程」を個別的諸資本の相互のからみ合いによる総体的運動過程として、つまりは「総体としての流通」の次元にまで展開しようとしていた」<sup>10)</sup>、と。

資本循環論が、基本的に以上のようなテーマと分析視角に貫かれていたとってよいならば、第3篇とは、少くともその基本テーマと分析視角に関する限り、別に異なるところはなかったとってさしつかえないからである。ただ「研究の対象」が拡がり、A—G—Wをも含ん

だ「社会的総資本の再生産と流通」の問題として拡大充実された点、したがってそこでは「価値補填」と「素材補填」との不可分な関係が表式によって展開されるところとなった点などはいうまでもないが。そこで、私は、第1篇資本循環論と第3篇社会的総資本論との有機的な関連性を一目瞭然と示すために、あえて誤解を恐れず、簡単な形式に要約した図式を次に掲げて説明しようと思う。



さて上図で、①の資本循環論の視角とは、一見して明らかなように、所得流通  $A-G-W$  および  $w-g-w$  がともに資本の循環運動に起源を發し、そこを發生の原因とも根拠ともして派生する第2次的流通運動以外ではない、ということ、とくに矢印をもって示しているのである。 $A-G-W$ の $A-G$ がそうであることは、既にみたように  $G...G'$  循環の如実に明示するところであった。 $A-G$  は、「貨幣資本から生産資本への転化を特徴づける契機」<sup>11)</sup> であって、資本の側からの運動である、労働力の購買  $G-A$  からのみ派生する。そしてこの  $G-A$  の推進動機が剰余労働の獲得にあることはいうまでもなく、したがってこの交換関係は、「単純な商品交換ではなく、剰余価値の生産に役だつべき商品  $A$  の買いであり」<sup>12)</sup>、しかも「生産手段と労働力との本源的な結合を解きほぐした歴史的な過程を前提する」<sup>13)</sup> ところの、独自の社会的な生産関係——分配関係ではない——にほかならないこと、かくして「社会

的に決定的な前提として」<sup>13)</sup>、まさに「過程の前提」たることを意味するものであった。だから  $A-G$  による賃金所得は、それが直ちに労働者階級の単なる社会的分配部分を示すものでないことも明らかである。要するに  $A-G-W$ の所得流通は、その第1段階において、資本運動に付属し従属していることをはっきりと識らねばならない。

次に  $w-g-w$  についても、これが資本の運動に起源をもちそこから派生する点は前者と同様といってよいが、しかしその源泉について「 $w$ は資本家にとって、少しも費用のかからなかった商品価値であり、剰余労働の具体化であり、したがって最初は商品資本  $W'$  の構成部分として舞台に現われる」<sup>14)</sup> という点、前者と本質的に区別されねばならない。このように  $w-g-w$ の第1段階  $w-g$  が「商品資本の流通  $W'-G'$  に、資本の循環に含まれている」ことから、 $W'-G'$ の結果、すなわち商品資本の貨幣資本への転化の結果、資本運動から分離されて派生する関係にある。だが、じつはそれだけに、この所得流通もまた資本の循環運動——とくに蓄積運動——の動向に固く結びつけられていて、この運動に従属していることはいうまでもない。なぜなら「この  $w$  そのものは、すでにその存在からみても過程進行中の資本価値の循環に結びつけられているのであって、もしこの循環が停滞するかまたは攪乱でもされるならば、 $w$ の消費が制限されるかまたはまったくやまってしまうだけではなく、それと同時に、 $w$ と換えられる商品群の販路も同じことになる」<sup>14)</sup> からである。ただし、 $w-g-w$ については上の関係と一見矛盾するかにみえる問題がある。それは、剰余価値の流通に関する特殊な流通様式の問題であって、これをマルクスは特別に第

2篇「資本の回転」論の第17章「剰余価値の流通」の箇所、「剰余価値を貨幣化するための貨幣はどこから来るのか」<sup>15)</sup>という問題として独自に提起し、さらには第3篇の第5節「貨幣流通による交換の媒介」でも再説していた。つまり、 $w-g-w$ の $w-g$ は、上に述べたように、本質的には $W'-G'$ の結果派生する関係にありながら、ただ実際には、そしてまたこの $W'-G'$ の実現過程が例えば長期にわたるなどの場合——ここにこの問題が回転論と関連する——には、資本家は、「これから手に入る剰余価値をあてにして自分自身に貨幣を前貸しする」<sup>16)</sup>ということ、すなわち実際には $w-g$ つまりは $W'-G'$ よりも前に「自分のポケット」から貨幣を支出して $g-w$ を行うという特殊な流通様式のことである。だがこのような $W'-G'$ なき $g-w$ が無際限に続くものでないことはもちろんであって、やはり前に述べた $W'-G'$ の転化に本質的に規制され制約されているという関係に変わりはない。ただ「将来の剰余価値をあてにした」資本家階級の「ポケット」からの貨幣支出が、社会的再生産の立場からみれば、 $W'-G'$ の実現のための流通手段の前貸という機能を果たし、その意味で「資本家階級全体について見れば、資本家階級は自分の剰余価値の実現のために（または不変資本も可変資本も含めての自分の資本の流通のためにも）自分で貨幣を流通に投ずるよりほかはない、という命題は、単に逆説的でないだけでなく、全機構の必然的な条件として現われる」<sup>16)</sup>といった関係は、この際やはり重視されてよい。というのも、こうしてわれわれは、次に前図での②の分析視角について語りうることとなるからである。

すなわち②の社会的総資本の分析視角とは、

所得流通が今度は $W'-G'$ の過程を実現して資本の流通と循環運動を媒介し、しかも「全機構の必然的な条件として」社会的に媒介する関係にあることを、矢印でもって示したものである。 $w-g-w$ は、上にみたように、現実には $W'-G'$ より前に $g-w$ を行なうという先後順序の逆関係を含みながら、というよりもこのことによって一層、その第2段階 $g-w$ が $W'-G'$ を実現して資本の流通・循環運動を媒介し、媒介することによって資本運動にひきとられてゆく。労働者の所得流通も同様で、その第2段階 $G-W$ がこれに対応する資本の流通 $W'-G'$ の過程を実現して資本の循環運動を媒介しながら、他方でこれにひきとられてゆくのである。ここでは、「消費が必然的に一役を演ずる」<sup>17)</sup>ことになるのである。このように所得流通が、資本の循環運動を維持し媒介するために「一役を演ずる」という意味で、②の視角を「媒介規定」ということができよう。けれども、こうした所得流通の媒介機能も、その発生の原因が何であったかという問題を抜きにしては、およそ何事も語ることはできない関係にある。その起源が「過程の前提」として先行する。これを示すのが①であり、したがって①の視角を「発生規定」とすることができる。こうして所得流通は、①に規定され従属しての②の媒介運動であるといってよく、その意味では「資本の流通に並列するものとして同位に取扱ってはならぬ」<sup>18)</sup>のである。所得流通は、その全てが①から発し、そうして派生した $A-G-W$ と $w-g-w$ とは資本の循環運動から一旦は離脱してそれ自身独自の流通を形成しながら、その第2段階 $G-W$ と $g-w$ で資本の流通・循環運動を媒介し、媒介することによってそのなかにひきとられてゆくという独得の流通運動を形成する。

媒介されて結果は何で終るのか、といった再生産過程における運動連関の序次が明らかにされねばならぬであろう。そしてこのような運動連関の序次を究明しようとするところに、じつは資本循環論の深い含蓄があったということは、いまや明白な筈であろう。

第4章「循環過程の三つの図式」は、以上のような資本の循環と再生産にみられる幻想的見地の批判を念頭において、これまで検討してきた第3篇の社会的総資本論の分析視角を一層彫琢しているように思われるが、この章の冒頭は、まさに次の言葉をもって始められるのである。

「3つの循環を総括してみれば、過程の前提は、すべて、過程の結果として、過程そのものによって生産された前提として、現われる。それぞれの契機が出发点、通過点、帰着点として現われる」<sup>24)</sup>、と。

註

- 1) Marx, *Das Kapital*. Bd. II, S. 93. 前掲同書, 156ページ。
- 2) *Ibid.*, S. 89. 同上書, 150ページ。
- 3) *Ibid.*, S. 70. 同上, 120ページ。
- 4) *Ibid.*, S. 54. 同上書, 94ページ。
- 5) *Ibid.*, S. 89. 同上書, 150ページ。
- 6) この点は、資本循環論全体の展開方法を識るうえで、きわめて重要な方法論上の問題を提起するであろう。資本循環論の方法視角については、1つの資本=個別的資本が同時に社会的総資本を代表する立場にあるとして「1=全」の視角を強調する有力な見解が、従来からまた最近でも提出されている。こうした見解が、『資本論』体系を「資本一般」と解する理解と踵を一つにしていることは、いうまでもない(最近の論稿として、山田鋭夫氏の「資本回転論の視座と課題(上)」『経済科学』第18巻第1号, 参照)。

だが、この「1=全」という理解が、資本循環の3つの形態を、全ての産業資本が共有するもの、すなわち「すべての個別産業資本に共通な運

動形態」という意味に解されるのであれば正しいが、「資本一般」の見地から個別的資本の立場が全て捨象されたものといった理解ならば、どうであろうか。

私は、前者の意味での社会的資本の運動形態という理解とともに、資本循環論の方法論的見地は、むしろ個別的資本の立場にあると考える。そうであるがゆえに、 $G \cdots G$ から $P \cdots P$ へ、さらに $W' \cdots W'$ への進展が、必然的に他の個別的資本の循環運動を前提し、それと絡み合う関係、こうして個別から総体性への展開として「資本の流過程」の内容が明らかにされうるからである。さらに資本循環論では、労働者の所得流通が、本文で考察したように、いわば「疎外」された地位にあるということは、個別的資本の立場によるもの、といわねばならない。

その意味で、私は資本循環論の方法視角を、むしろ「1→全」と解したい。そしてこのように理解した上で、第3篇の社会的総資本論の見地と内容の相違とが、本文でも述べているように、認識されねばならないであろう。

- 7) *Ibid.*, S. 353. 同上書 (7), 8—9ページ。
- 8) *Ibid.*, S. 395. 同上, 75ページ。
- 9) *Ibid.*, S. 396. 同上, 75—76ページ。
- 10) 拙稿「諸資本の競争と信用論の展開」『金融経済』(金融問題研究所), 149号, 30ページ。
- 11) *Ibid.*, S. 27. 同上書 (5), 51ページ。
- 12) *Ibid.*, S. 70. 同上, 119ページ。
- 13) *Ibid.*, S. 31. 同上, 57ページ。
- 14) *Ibid.*, S. 64. 同上, 110—111ページ。
- 15) *Ibid.*, S. 330. 同上書 (6), 283ページ。
- 16) *Ibid.*, S. 424. 同上書 (7), 119—120ページ。
- 17) *Ibid.*, S. 395. 同上, 74ページ。
- 18) 高木暢哉著『再生産と信用』(有斐閣), 55ページ。
- 19) 高木暢哉, 同上書, 76ページ。

所得流通に関する同様の趣旨が、他の箇所でも次のように述べられる。「社会的規模で行われる所得の社会的流通は、 $A-G-W$ も $w-g-w$ も、ともに社会的総資本の運動の内部に位置づけられ、その働きを規定されていることは注目されてよからう。……資本の運動の内部に属し、それに従い、そこから生れ、そこに帰る派生補足の第二次の流通である」(同上書, 55—56ページ)。

なお本書は、資本循環論に内在する論理が、資

## 商品資本の循環について

本制再生産の総体的運動過程の解明にあることをはじめて闡明にされた点、種々有益で貴重な示唆を与えられた。

- 20) 以上のような表式論の理解と解釈は、既に早く宇野弘蔵氏の「再生産表式論の基本的考察」(『資本論の研究』岩波書店、所収)において提出され、その後も一つの有力な見解として継承されてきていることは周知のとおりである。次のように主張される。

「それ(再生産の表式)は単に社会的再生産に一般的に共通なる基礎関係を、資本主義的特殊形態による数式として表現したものに過ぎない。

『資本論』第1巻は、商品及び貨幣の一般的商品経済理論に基いて剰余価値の生産とその剰余価値の資本化の過程を究明し、第2巻はかかる生産過程が商品経済的に可能なる為めの形式的条件としての流通過程を明らかにするのであるが、その最後の篇はかかる資本主義的生産の基本的過程を一般的社会的基礎に給括するものである」(同上書、133—4ページ)。「商品資本の循環形式をとることは、問題を『経済表』として見ることと必然的に関連している。私はむしろ『資本論』第2巻のこの篇の問題を、マルクスの『経済表』として見る点を強調したいのであって、商品資本の循環形式はしたがってここでは特に重要な意義を有するものと考えている」(同上、137ページ)。

- 21) 高木幸二郎著『恐慌論体系序説』(大月書店)、

188ページ。

本書の当該箇所は、註20)の宇野氏の所説に対する批判にあてられていて、消費の問題が次のように指摘される。「この点(消費が剰余価値の生産と切離しては考えられないという点)は再生産表式については、使用価値の契機すなわち消費が $c+v+m$ の必然的展開として、すなわち $c$ については生産手段の消費として、 $v$ と $m$ については労働者と資本家による消費手段の消費として(単純再生産)、あるいは $m$ の一部分の再投資による蓄積のための生産手段と消費手段の消費として(拡大再生産)把握せられる。……したがって消費はこの場合、価値生産したがって剰余価値の生産との関連において、これを媒介するものとして把握することによってのみ正しく解決される」(同上書、188ページ)。

- 22) この点、前掲拙稿「諸資本の競争と信用論の展開」(『金融経済』149号)の三節、「三位一体範式批判と再生産視角」以降の論述を参照していただければ幸である。

- 23) K. Marx, *Theorien über den Mehrwert, Werke* 26—III, S. 497. 『剰余価値学説史』(大月書店)『マルクス・エンゲルス全集』第26巻Ⅲ、653ページ。

- 24) *Das Kapital*, Bd. II, S. 95. 『資本論』前掲同上書、(5)、160ページ。

〔未完〕